Architectural Institute of Japan

日本建築学会北陸支部研究報告集
第49号　2006年 7月

【7－5－f】

新潟県下越地方における歴史的建造物群の残存状況と建築特性
—中蒲原・東蒲原両郡地域を対象として—

Remaining situation and architectural characteristic of Historic buildings in Niigata Prefecture Kaetsu district
—A case of Nakakanbara and Higashikanbara District area—

加藤　健二[*1]　　岡崎篤行[*2]
Kenji KATO　　Atsuyuki OKAZAKI

The survey and the research of Town house have lagged behind compared with th e Farmers house. Therefore, this paper aims principally at Town house. The purpose of this paper is to prove remaining situation and architectural characteristic of historic buildings in Nakakanbara and Higashikanbara District. As a result, the percentage of historic building is 20% in this area. The form of Town house and Farmers house are classified into ten forms. The road becomes an axis and The direction of Town house is Tateya against the road. There is no Mizukiriita.Eburiita and Segaidukuri are wide ly distributed.

Keywords *Niigata Prefecture, Historic Buildings, Remaing Situation, Arcfitectural Characteristic*
新潟県　歴史的建造物　残存状況　建築特性

1　研究の背景と目的

町屋は農家に比べ地域特性が把握しにくいといわれており[1)]、このため町屋の調査・研究は農家と比べて立ち遅れてきた。またその影響もあり、歴史的町並みの把握も十分に行われていない。文化庁では1998年に歴史的町並みの全国的な調査を行っているが、網羅的に把握できてはいない。全国的な調査では見落としが多いため、都道府県レベルでの悉皆的な調査が必要である。以上のような観点から、本研究は町屋に主眼を置く。

近年の町屋・町並みを対象とした調査・研究は、一部の町屋や単独の町並みを対象としたものがほとんどである。これはその町屋・町並みの特性を捉えることには有効であるが、地域全体の特性を捉えることは難しく、広範囲を対象とした調査・研究が必要であると考えられる。

現在新潟県では岩船・北蒲原両郡地域における歴史的建造物[(1)]の残存状況及び建築特性が明らかにされている。本研究はこれらに続くもので、中蒲原・東蒲原両郡地域を対象として、歴史的建造物群の残存状況および建築特性を明らかにすることを目的とする。

2　研究方法と対象地概要

まず文献4)により対象地域内を通る街道の位置を把握し、次に文献5）を用い、その街道沿いにある集落の位置と属性を把握する。さらに住宅地図と地形図を用い、現存する集落の位置を確認する。確認できた集落において、敷地外から傍観できる範囲で建造物外観の悉皆調査を行い、歴史的建造物の抽出及び建築特性を調査する。なお集落の調査範囲は、絵図や住宅地図、地形図を用いて決定する。

中蒲原・東蒲原両郡地域は新潟県の北東部に位置し、東は福島県と接する。地域内に信濃川・阿賀野川が流れる（図1)。面積は約1,500k㎡、人口は約227,000人。江戸時代は、中蒲原郡地域は新発田藩と村松藩に、東蒲原郡地域は会津藩に属していた。近代に入り中蒲原郡地域は新潟県に属していたが、東蒲原郡地域は当初、福島県に属していた。1886（明治19）年になって東蒲原郡地域は新潟県に編入された。主な街道としては三国街道中通り、会津街道がある。特に会津街道は佐渡金山と江戸とを結ぶ街道として特に重要視されていた。

*1 新潟市役所　修士(工学)　　Graduate Student,Niigata City hall
*2 新潟大学工学部建設学科　助教授・工博　　Assoc.Prof,Dept.of Civil Eng.and Arch.,Faculty of Eng.,Niigata Univ.,Dr.Eng.

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

3　歴史的建造物郡の残存状況と集落の評価

3-1　歴史的建造物群の残存状況

調査対象80集落(図1)における建造物外観の悉皆調査の結果[2]、対象地域の建造物棟数は18958棟、歴史的建造物と考えられるものは2987棟で、全体の残存率[3]は16%である。歴史的建造物のうち主屋は1266棟で歴建主屋率[4]は42%、主屋残存率[5]は12%（表1）であった。

また主要な街道別にみると、会津街道が残存率、主屋残存率、歴建主屋率で最も高くなっている(表1)。特に主屋残存率、歴建主屋率が高く、主屋の歴史的建造物が良く残っているといえる。集落別では、五泉が歴史的建造物の総棟数及び主屋の歴史的建造物の棟数において最も多い。残存率、主屋残存率では会津街道の行地がそれぞれ42%、83%で最も高い。歴建主屋率では会津街道の柳新田が100%で最も高い（表2)。町場の集落の各町丁の残存状況では、棟数が最も多いのは、亀田の本町2丁目で45棟。残存率が最も高いのは小須戸の本町2丁目で55%で、主屋残存率でも57%で最も高い（表3)。

3-2　残存状況からみた各集落の評価

特に残存状況が良好な集落を抽出する為に、各集落の評価を行う。評価方法は、各集落の歴史的建造物の総棟数・主屋の歴史的建造物の棟数・歴建主屋率・残存率・主屋残存率の、それぞれの数値をA～Eの5段階に分け[6]、段階に応じて1～5の点数をつける。これらの点数の合計をさらに4段階に分けて総合の評価とする(表4)。

その結果、総合評価がAである集落は、白根・小須戸・津川であった(表5)。なお小須戸・下綱木・上綱木・木越では比較的外観が旧態を保持し意匠が優れている歴史的建造物が多く、亀田は歴史的建造物の多くが丁字造り（後述）で地域的特性を良く反映していた。

表1　対象地域全体と各街道の残存状況

街道名	建造物総数	歴建総数	主屋歴建総数	歴建主屋率	残存率	主屋残存率
亀田道	5561棟	671棟	247棟	37%	12%	8%
三国街道中通り	4247棟	605棟	234棟	39%	14%	9%
村松道	3660棟	577棟	242棟	42%	16%	11%
三国往還	2881棟	518棟	204棟	39%	18%	14%
荻野島－熊野堂	842棟	65棟	13棟	20%	8%	4%
会津街道	1880棟	373棟	246棟	61%	20%	23%
対象地域全体	18958棟	2987棟	1266棟	42%	16%	12%

表2　残存状況の上位集落

	歴建総数	主屋総数	歴建主屋率	残存率	主屋残存率
1	五泉(201棟)	五泉(139棟)	柳新田(100%)	行地(42%)	行地(83%)
2	白根(162棟)	白根(134棟)	白根(83%)	割町(38%)	柳新田(60%)
3	津川(149棟)	小須戸(97棟)	上綱木(80%)	小須戸(36%)	水沢(37%)

表3　町場における町丁ごとの残存率上位地区

	集落名	町丁	歴建総数	歴建主屋	歴建主屋率	残存率	主屋残存率
1	小須戸	本町2丁目	24棟	17棟	71%	55%	57%
2	白根	一の町	38棟	27棟	71%	46%	40%
3	小須戸	本町4丁目	19棟	14棟	74%	44%	41%
4	亀田	本町2丁目	45棟	25棟	56%	42%	30%

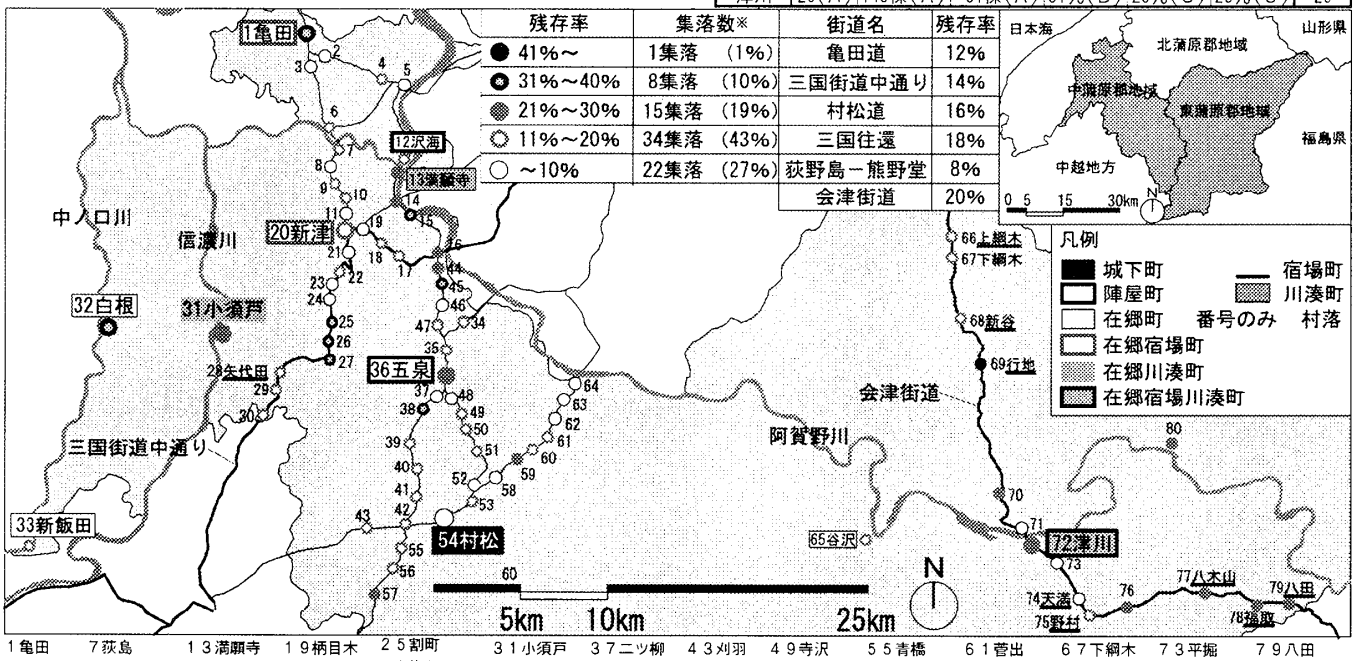
表4　集落の評価基準

	点数	歴建総数	主屋歴建数	歴建主屋率	残存率	主屋残存率	総合得点※
A	5点	81棟～	41棟～	81%～	41%～	41%～	20点～（3集落）
B	4点	～80棟	～40棟	～80%	～40%	～40%	15～19点（8集落）
C	3点	～60棟	～30棟	～60%	～30%	～30%	10～14点(28集落)
D	2点	～40棟	～20棟	～40%	～20%	～20%	5～9点(41集落)
E	1点	～20棟	～10棟	～20%	～10%	～10%	

※（　）は該当する集落数

表5　総合評価上位集落の残存状況

集落名	総合評価	歴建総棟数	歴建主屋数	歴建主屋率	残存率	主屋残存率	総合得点
白根	23(A)	162棟(A)	134棟(A)	83%(A)	36%(B)	33%(B)	23
小須戸	20(A)	125棟(A)	97棟(A)	78%(B)	29%(C)	28%(C)	20
津川	20(A)	149棟(A)	91棟(A)	61%(B)	29%(C)	26%(C)	20



1亀田	7荻島	13満願寺	19柄目木	25割町	31小須戸	37二ツ柳	43刈羽	49寺沢	55青橋	61菅出	67下綱木	73平掘	79八田
2袋津	8結	14中新田	20新津	26塩谷	32白根	38能代	44市新	50泉田	56南田中	62中川新	68新谷	74天満	80水沢
3城山	9川口	15大安寺	21田家	27金津	33新飯田	39町屋	45下新	51木越	57上野	63猿和田	69行地	75野村	
4川根町	10下興野	16金屋	22程島	28矢代田	34一本杉	40千原	46羽下	52馬場	58熊野堂	64荻野島	70柳新田	76花立	
5横越	11善道	17飯柳	23中村	29天ケ沢	35三本木	41笹野町	47下条	53宮ノ下	59高内	65谷沢	71角島	77八木山	
6二本木	12沢海	18金沢	24古津	30鎌倉新田	36五泉	42中ノ橋	48吉沢	54村松	60早出端	66上綱木	72津川	78福取	

図1　対象集落の位置と各集落の残存率

※カッコ内は80集落に対する割合

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

4 歴史的建造物群の建築特性

4-1 町屋の分類と各集落の優勢類型

主屋の歴史的建造物は町屋617棟、長屋32棟、農家493棟、近代和風住宅59棟、和洋折衷住宅12棟、近代洋風住宅8棟に分類できる。さらに町屋は、『形態』『棟の向き』[7]『階数』『屋根形状』の順で分類し、10棟以上見られた10タイプを抽出した（表6）。なお『形態』とは建造物の外形と棟の形をそれぞれアルファベットで表した指標である（図2）。

最も多いのがタイプ①（図3）で、形態がI-I・竪屋・2階建て・屋根形状が切妻のもので191棟。次いで多いのがタイプ⑧（図4）で、形態がI-T、棟の向きが前面道路から横屋から竪屋と続き、2階建て・屋根形状が切妻のもので150棟であった。なお本研究ではタイプ⑧及び⑨(図6)・⑩を「丁字造り」と定義する。次に多いのがタイプ⑤(図5)で、形態がI-I・横屋・2階建て・屋根形状が切妻のもので72棟見られた。このタイプ⑤や⑥・⑦の横屋は、建物の間口が奥行よりも長いか、もしくは同程度となっており、村上や瀬波に見られる、間口に対し奥行が長い横屋はこの地域では見られなかった。

またこれらの分類を大きくタイプ①～④の竪屋、タイプ⑤～⑦の横屋、タイプ⑧～⑩の丁字造りに分類し、町屋が10棟以上[10]見られる集落において、この3分類の棟数と構成比を示したものが図7である。竪屋が優勢である集落は、白根・小須戸・新飯田、丁字造りが優勢な集落は亀田・新津・村松・五泉、津川は竪屋と丁字造りが拮抗している。横屋が優勢な集落はない。

4-2 町場における町屋の棟の向き(図8)

図8は白根の一の町付近における町屋の棟の向きである。図中の細い実線が主屋の歴史的建造物の棟の向きで、破線が街道である。ほとんど全ての棟の向きが竪屋であることがわかる。横屋は①・②の2棟確認できるが、いずれの場合も、敷地形態が前面道路から見て奥行が短いという、一般的な町屋の敷地形態と比べ特殊な形状をしており、建物は村上や瀬波の横屋とは異なり、間口に対し奥行が短くなっていることがわかる。街道と棟の向きに着目すると、街道に対して棟の向きが規則正しく竪屋になっていることがわかる。

4-3 農家の分類と各類型の分布

農家は、『形態』『屋根葺材』『屋根形状』『玄関方向』『下屋の有無』の順に分類し、特徴的であった10タイプを抽出した（表7）。タイプ①、②、④が大半を占め、こ

表6 町屋の分類表

タイプ	形態	棟の向き	階数※	屋根形状	棟数
①	I-I	竪屋	2階	切妻	191棟
②				寄棟	11棟
③				入母屋	11棟
④			1階	切妻	17棟
⑤		横屋	2階	切妻	72棟
⑥				招き屋根	19棟
⑦			1階	切妻	14棟
⑧	I-T	横屋→竪屋	2階	切妻	150棟
⑨				招き屋根	15棟
⑩	L-T	横屋→竪屋	2階	切妻	12棟

※「階数」は前面道路から見て一番手前の棟の階数を示す

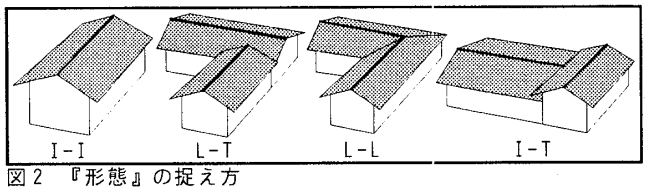


図2 『形態』の捉え方

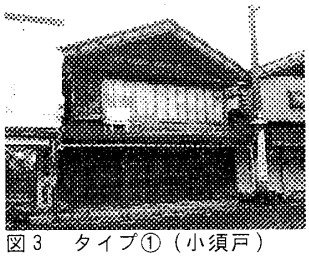


図3 タイプ①（小須戸）

図4 タイプ⑧（五泉）

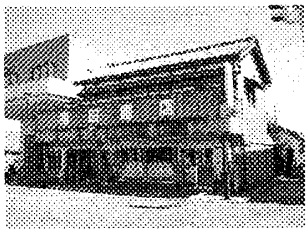


図5 タイプ⑤（亀田）

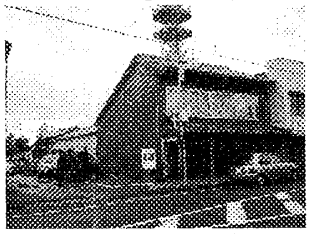


図6 タイプ⑨（新津）

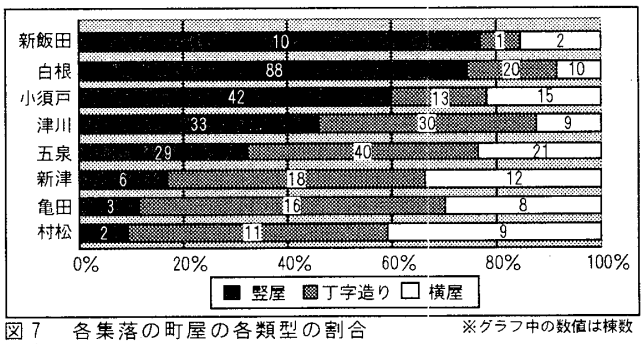


図7 各集落の町屋の各類型の割合 ※グラフ中の数値は棟数

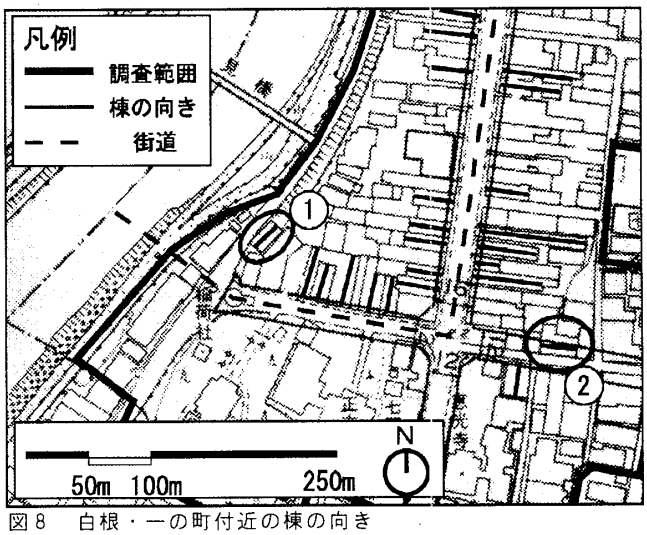


図8 白根・一の町付近の棟の向き

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

れらは地域全域に広がっている。一方タイプ③、⑤、⑥(図9)・⑦(図10)・⑧・⑩は東蒲原郡地域に、タイプ⑨は中蒲原群地域に分布している。

4-4 町屋外観の意匠

町屋外観の意匠で最も良く見られたものは戸袋で178棟に見られた。戸袋は2階の開口部端に付くのがほとんどである。せがい造りは横屋又は丁字造りの場合に多く174棟見られた。雁木は116棟の町屋に見られ、街道に立地する町屋がほとんどである。下屋のある町屋は106棟あり、小路に立地する町屋に多く、街道に立地するものでも集落の周縁部に立地しており、集落の中心部に下屋のある町屋はほとんどない。2階開口部には、30棟に窓付き雨戸（図11)、81棟にガラス雨戸（図12）が付いていた。2階壁面が1階壁面より出ている跳ね出し廊下(図13）は57棟見られた。庇の端部を収めるの用いられる柄振板（図14）は32棟にみられ[9]、1階と2階の庇の一方又は両方に付く。格子のある町屋は25棟で、2階開口部に付くものは6棟のみであった。以上の意匠は対象地の広範囲に分布している。以前は各地で見られた鼻隠しは小須戸にのみ5棟確認できた。岩船郡地域沿岸部の集落に多く見られた水切板は、見られなかった.

5 結論

(1) 全体の残存率は16%、主屋残存率は13%で、歴建主屋率は42%であった。会津街道の残存状況が良く、集落では会津街道の行地が残存率42%、主屋残存率83%で最も高く、残存状況から総合的に判断し、白根・亀田・小須戸が特に重要な集落と考えられる。

(2)町屋は10タイプに分類でき、竪屋が優勢な集落は白根・小須戸地区、丁字造りが優勢な集落は亀田・新津・村松地区に別れており、横屋が優勢な集落は袋津のみであった。農家は10タイプに分けられ、中蒲原郡地域と東蒲原郡地域とで地域差が見られた。

(3) 町場の町屋の棟の向きは、基本的に街道が軸となりそれに対し竪屋になっている。敷地が間口に広く奥行に短い場合に横屋になることが多く、村上の様な奥行の長い横屋は見られない。

(4) 鼻隠しは小須戸にのみ見られ、せがい造り・柄振板・跳ね出し廊下などは広範囲に見られた。町屋の2階開口部には格子ではなく窓付き雨戸、あるいはガラス雨戸が付く。水切板は、中蒲原郡、東蒲原郡地域では、あまり普及していなかったと考えられる。

表7 農家の分類表

タイプ	形態	屋根葺材	屋根形状	玄関方向	下屋の有無	棟数
①	I-I	茅葺以外	切妻	平入り	有り	58棟
②					無し	297棟
③		茅葺	切妻	平入り		4棟
④			寄棟	平入り		72棟
⑤				妻入り		6棟
⑥			兜造	平入り		3棟
⑦	L-L			妻入り		8棟
⑧			寄棟			8棟
⑨				平入り		3棟
⑩	L-T	茅葺以外	切妻	妻入り		6棟

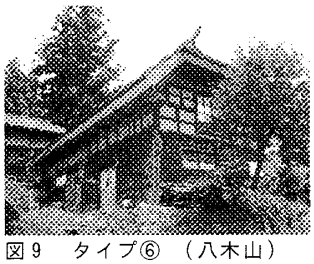


図9 タイプ⑥ （八木山）

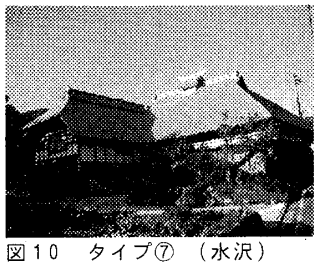


図10 タイプ⑦ （水沢）

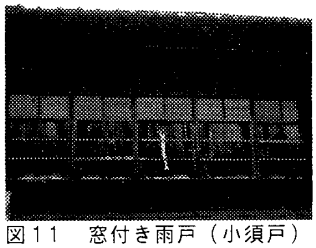


図11 窓付き雨戸（小須戸）

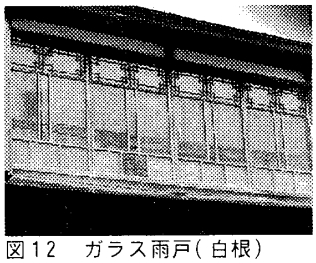


図12 ガラス雨戸(白根)

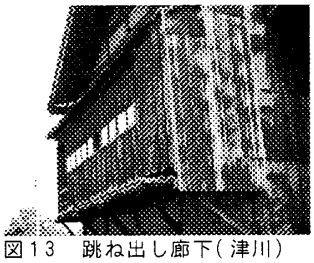


図13 跳ね出し廊下(津川)

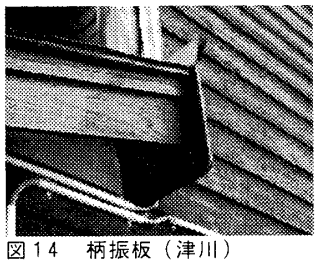


図14 柄振板（津川）

【補注】

(1)本研究では、歴史的建造物を「第2次大戦以前に建てられた建造物」と定義する。

(2)建造物の悉皆調査は2005.4～2005.11にかけて行った。

(3)歴史的建造物の総棟数を建造物の総棟数で除した百分率。

(4)主屋の歴史的建造物の棟数を歴史的建造物の総棟数で除した百分率。

(5)主屋の歴史的建造物の棟数を主屋の建造物の棟数で除した百分率。主屋の残存具合を端的に表す指標である。

(6)段階の境界は先行研究である文献2)、文献3)の数値も考慮し決定した。

(8)5棟未満である場合、1棟の増減でどのタイプが優勢であるか変わってしまうため、5棟以上とした。

(9)柄振板は調査途中で新たに確認した意匠で、大部分を写真で確認を行っており、棟数は若干多くなると推測される。

【参考文献】

1)大場修「近世近代　町家建築史論」中央公論美術出版,2005
2)佐藤憲明・岡崎篤行「街道沿いの集落における歴史的建造物群の残存状況と特性　新潟県岩船郡とその周辺を対象として」日本建築学会大会学術講演梗概集,F-1,pp.997-998,2004
3)五十嵐浩「新潟県における歴史的建造物群の残存状況とその建築的特性」新潟大学大学院自然科学研究科環境システム科学専攻建築学教育研究群修士論文,2005
4)小村弋「図説　新潟県の街道」郷土出版社,1994
5)草間文績「越後輿地全図」1818

NII-Electronic Library Service